富山大学人文学部富山循環型「人文知」研究プロジェクト公開研究交流会

第 28 回　人文知コレギウム
――いま、語り伝えたいこと――

齊藤大紀（中国文学・教授） 13:30–14:30

天鵞絨の哀愁

――富山県入善町出身の歌手・津村謙の生涯

富山県下新川郡新屋村（現入善町）出身の津村謙（1923-61）は、「上海帰りのリル」をはじめとする数多くのヒット曲をもつ、戦後期の日本の歌謡界を代表する歌手の一人であった。津村は、「ビロードの唄声」と讃えられた美しい高音を持ち味として、焼跡から復興してゆく日本の都市の哀愁をうたうことを得意としていた。この報告では、津村の生誕百周年を前に、入善町コスモホールに所蔵される津村謙関連資料の調査の成果も新たに加えて、その人生をたどりつつ、津村が目指した流行歌のありかたを考えたい。

秋田万里子（アメリカ文学・講師） 14:30–15:30

母性という隠れ蓑―Cynthia Ozick の“The Shawl”における信頼できない語り手によるホロコースト・ナラティブ―

アメリカ生まれのユダヤ系作家 Cynthia Ozick (1928-) の代表作 “The Shawl” (1980) は、強制収容所における母と娘の悲劇を描いた短編である。本作ではポーランドのユダヤ人 Rosa の視点を通して語られるが、その中で、娘 Magda に対する Rosa の母性がたびたび強調される。先行研究は主に、Rosa が娘に対し愛情深く献身的な母親であることを前提に考察されてきた。しかし“The Shawl” における Rosa の母性には、娘に対する純粋な愛情だけではなく、その信頼できない語りの陰にネガティブな感情や思考を隠蔽しようとする Rosa の意図が窺える。

本発表では、主に短編 “The Shawl” における語りの手法に着目し、母性の強調によって隠された Rosa の真意を解き明かす。そして本作において、強制収容所における非道さ・残虐さを語るために、母性のイメージがどのように機能しているか考察する。

以下の QRL または URL から事前申し込みをお願いします。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeIpdIs34n-dZug8wVHpmKozFQZxi7JXh_yo0vn5xQvE7udPg/viewform?vc=0&c=0&w=1&flr=0

日時　2022 年 1 月 26 日（水）

13:30–15:30　オンライン Zoom

お問い合わせ　富山大学人文学部人社系総務課（人文担当）
jinbuns@adm.u-toyama.ac.jp